

高齢者等の介護サービス提供者に対する 実践力向上のための研修の取り組みについて

青田 俊枝¹⁾ 長門 五城²⁾ 四戸 龍英³⁾

1) 社会福祉法人青森県社会福祉協議会 青森県介護実習・普及センター

2) 青森県立保健大学、3) 有限会社リュウコーポレーション

Key Words : ①車いす ②シーティング
③研修企画

I. はじめに

介護実習・普及センターは、高齢者介護の質向上を目的に高齢者等の介護サービス提供者に対して、確かな介

護知識と技術及び適正な福祉用具の活用を普及するため、各種現任研修の充実・強化を図っている。特に、福祉用具は近年めざましい勢いで日進月歩しているため、これまで企画した研修は、最新の機器や技術の情報を提供することに特化した傾向にあった。

これまで企画した研修については、受講者による研修の評価は概して高いものの、①知識は得られるが技術を習得できない。即、業務に活用できない、②新しい福祉用具は職場にはないので、従来の用具を用いて研修をして欲しい、といった意見も散見し、研修の企画・運営に課題を感じていた。

そこで今回は、福祉用具として広く普及している「車いす」に焦点を当て、介護業務への活用効果を期待できる実践的な研修プログラムを企画し、実施することとなった。

II. 研修の概要

1. 研修のねらい

褥瘡等、種々の二次障害の原因となる車いすの不適合について考察し、使用者の身体状況や使用目的に適合した車いすの調整について、業務に活用できる知識と技術を習得し、その技術を普及・伝達できる人材の育成を目指す。

2. 研修期間

平成20年7月1日(火)～11月4日(火)

3. 研修方法

1) 従来研修との比較

従来は、様々なモジュール型調整機能付き車いすを用いて、使用者の身体状況等に調整することの重要性を学ぶ研修としてきたのに対し、本研修は、『1回目の研修で標準型車いすでの座位保持の調整を中心とした講義・実習を行い(シーティング)、受講した内容を各施設に持ち帰り、知識や技術を確認するための課題実習を行う。2回目の研修では、各受講者が行った実習課題の事例検討を行い、疑問・課題を確認し、それらに対しフィードバックを行う。受講者はフィードバックされたものを再び施設に持ち帰り、疑問・課題を解決する実習を行う。3回目の研修で再び課題に対する事例検討を行い、問題解決のための知識・手法を受講者間で共有する』と、いった内容で、各施設におけるシーティングの定着を図ることを目的として行われた。ちなみに、施設における課題実習では、①教材として配付したウレタンクッションを用いてアンカーサポート(座骨前方支持)を作成、②ビーズクッションやバスタオルで体幹支持あるいはランバーサポートを作成、③アンカーサポートをマジック

表1 従来の研修と今回の研修の日程及び内容の比較

	従来の車いす研修	今回の車いす研修	
日程	1日:10:00～15:30 (講義・実技)	①3日間:10:00～15:30 (講義・実技・事例検討) ②各施設での課題実習(6種類のクッションを提供した上で行う)	
内容	モジュール型車いすを使用し、調整の重要性と技術を学ぶ。	講義 1日目	良い座位姿勢と車いすの構造、不適合による弊害についての講義。6種類の素材のクッションを様々な形状にカットするなどして、グループ毎にシーティングを行う実技。
		施設 実習	・困っている事例のシーティングに取り組む。 ・取り組む前後に、対象の前/後/左/右/上から写真を撮影する。 ・A4 1枚程度の記録提出。
		講義 2日目	事例報告会。受講者全員が事例を発表し、それぞれにスーパーバイズを受ける。
		施設 実習	上記事例検討を踏まえ、新たな事例あるいは同じ事例に対し、上手く行かなかった点等を改善する。
		講義 3日目	最終報告会と総評。現場で出来る取り組みについて。

テープで固定、等、どれも各職場にある標準型車いすを使用し、シーティングに取り組んだ。

財団法人東京都高齢者研究・福祉振興財団,2007.

3) 国際福祉機器展 H.C.R.2006 福祉機器選び方・使い方, 財団法人保健福祉広報協会, 2006.

2) 対象者

県内福祉施設に勤務する36名

Ⅲ. 研修の結果及考察

すべての研修終了後、受講者に対してアンケートを実施し、研修の感想や意見、問題点の指摘等を求めた。今回は『業務に活用できる実践的な研修』をねらいの一つとしていたが、アンケート結果からは「今回の課題だけではなく、他の利用者にも活用している」「他職員も交えて実施した」「伝達研修で役立つ」「自分自身より施設に役立つ」等の意見があり、研修が実践的であったことを伺わせた。また、「食事・水分摂取がスムーズになった」「しゃべれるようになった」「目に見えて効果が出た」等、明確なアウトカムが現れたことについても言及され、即戦力的な知識と技術が習得されたことも示唆された。

さらに今回は、従来の研修で散見された「(新しい福祉用具がないから)教わった技術を出来ない」といったような評価は皆無で、むしろ「簡単なもので調整できる技術を覚えた」との感想があり、最新の機器や情報提供に専心する研修の企画を一顧する機会となった。

一方で、施設側にクッション等に係る資金や人的問題の理解が得られないという意見も見られ、また、「今後シーティングに関する相談窓口が必要か」という質問には、約8割が「必要」と回答しており、各施設におけるシーティングの継続には課題も示唆された。

Ⅳ. 文献

- 1) 福祉用具プランナーテキスト, 財団法人テクノエイド協会, 2006.
- 2) 市川 洸他, 高齢者・障害者の生活を支える福祉機器,